

# 六花

り  
つ  
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada  
*cover designed by masami*

10月号



貫

山田六甲

岩に腹当てゐる魚や秋初め  
檮けやきより色鳥こぼれ来たりけり  
石垣を飛び降りる手に木の実かな  
足許もとへ秋灯伸ばし来たる波  
上げ潮にのりくる夜半よわの水母くらげかな  
豆畑の雲は伊吹へ風の色

みずうみへ渡りてゆける荻の声  
夕滝を見つめおでんに箸を割る  
沙羅の樹の下に団栗拾ひけり  
傾ける床几におでん盛れる皿  
秋の滝鱗をなして落ちにけり  
夕暮れや帆船ボトルシツブに秋日さす  
鴟ちすの声跳はね返したる窓硝子  
水澄むやにはかに杭をかこむ風  
朝の月一枚岩の舟渡し

ことり

望<sup>もちづき</sup>月をなぞらば指の切れぬべし  
秋の空さらりさらりと鳶<sup>とび</sup>すべる  
秋風の流れを鳶に見てをりぬ  
たはむれの羽ぶつけあひ秋の鳶  
痛むまで夜の秋風にさらす胸  
爽<sup>さわ</sup>やかや飾り扇の桐の箱  
原石をもてあそびゐる夜長かな  
陵<sup>みささぎ</sup>の丘くつがへす葛<sup>くず</sup>の風  
猫耳を寝かせて帰る初嵐

颱風たいふうの逆卷さかまいてをる大樹たいじゆかな  
金網きんもうを葉はの打ちうちのめす野分のわきかな  
ひと粒ひとつぶも零こぼさぬ稲穂いなほ野分のわきなる  
野分のわきかな案山あか子かしまたたく間に老おいゆる  
稲いなの穂ほの匂におひ濃のかりき野分のわき後あと  
満月まんげつにあかんぼ泣ないてしまひけり  
宮相撲みやざもう負まけてあんぱん貫くわんひけり  
宮相撲みやざもうおむつの上うへのまはしかな  
新涼しんりやうや寝起ねおききの髪かみを指さで梳すき

# 汗の子のどこに触れても柔らかし 三井孝子

回り道ただただ見たし飛ぶ虫

天の川湯音空まで響ひびかせて

白ばかり誉められてをり庭の薔薇ばら

雨やさし先端まで咲く立葵たちあおい

あせのこのどこにふれてもやわらかし

子供を慈しむ気持ち溢れている。本来なら汗をかいた体に触れることは不快なはず。だが子供は違う。可愛いといわず「柔らかし」という言葉に置き換えたことが可愛さを何倍にも増して表現し得た。また「どこに触れても」が子供のみずみずしさ、弾力性を捉えて見事である。

浮いて来い

貝森光洋

せいいつぱい楽しい顔で浮いて来い  
人妻の皆美しき夜店かな  
天と地の契りしごとく夕焼ける  
蠅帳はえちように妻の手紙の添えてあり  
金魚の糞長持ち夫婦の秘訣かも

平方根

梶浦玲良子

泉殿ふじさんろくにおうむなく  
飽きもせずだるま落しを羽抜鶏はぬけどり  
竹の子の育ち過ぎたるうはの空  
梅雨ゆだ茸けや茜の雲の子沢山  
測距儀の三脚に草芳かんばしき

茄子なすの花

木内美保子

荒梅あらつゆ雨ゆや野川の水をどり飛ぶ  
 一つづつ風と売れ行く風鈴屋  
 ひらひらと風を流して夏のれん  
 長雨ながさめや濡葉ぬればに落ちし茄子なすの花  
 さらさらと雨にけぶらふ大青田

籐寢椅子とうねいす

笹村政子

沖雲くろはのすでに秋めく大門おおとかな  
 黒南風くろなまかぜや浜辺に埋もれある漁網  
 捨舟すてふねや月見草色溢れしむ  
 粗塩くろしほの光溶け入る胡瓜もみ  
 滑り入り窪くぼみの残る籐寢椅子

雨戸

水谷ひさ江

滴りにふくべの器置いてあり  
 風通す家の真中よ酷暑こくしよなる  
 灯を点けず湯浴みしてをり虫の夜  
 きりぎりす伏せたる筈の中に鳴く  
 虫の夜半雨戸しづかにたてにけり

月供養

小田元

約束すすきかぜの仁徳にんとくりよう陵りやうに月昇る  
 六甲  
 芒風すすきかぜ月より降りて来しと思ふ  
 月光の神戸港が好きやねん  
 六甲

※元さんの口癖「わし、六花好きやねん」

# 雪樹集

初物 池崎るり子

日暮来て熟れごろの枇杷見上げをり  
もぎたての初物の枇杷供へけり  
レース張り母の遺品の白日傘  
海の日や豪雨の被害思ひ知る  
壊さるる汚れ蠅取りボンかな

白ばかり 三井孝子

回り道ただただ見たし飛ぶ虫  
天の川湯音空まで響かせて  
汗の子のどこに触れても柔らかし  
白ばかり誉められてをり庭の薔薇  
雨やさし先端まで咲く立葵<sup>たちあおい</sup>

あぢさゐ K O K I A

あぢさゐの一輪に花器満たさるる  
投句箱すみかとしたる四十雀<sup>しじゅうから</sup>  
サーファーに風の遊んでをりにけり  
寄す波の白さことさら梅雨晴間  
朝顔の花びら指にからみけり

六花集



六甲選

永田 勇

目の前に現あれては消ゆる蠅を待つ

立ち上がり頭上の蠅を追へる猫

鈴すず生りの枇び杷わに傷なき物のなし

日焼けせる袋より枇杷取り出しぬ

戴かきし大きな枇杷や唾を飲む

久永 つう

鈴の音を残して登山道に消ゆ

夕ゆう風なや浜なに静かな波の音

山深くゆくほどに風涼しかり

巢ね作りに休むことなき燕かな

川音を抱きて霧の流れけり